

# ヒトは宇宙人の子孫か？

## ——新科目「自然と人間」の実践報告——

杉 谷 隆  
長 尾 朋 子

### 1. 新科目の位置づけ

96年度から、旧地理、歴史、哲学科は人文科学学科に統合された。入学者は学科で一括募集され、2年次の冬学期から、旧学科の3専門コースか総合コースのいずれかに進学する。専門コースの定員制限はないので、進学者数は如実に人気を反映する。新学科では、進学前の学生を主対象とする共通科目が新設され、地理学コースは「人間と空間」、「自然と人間」を提供することになった。「自然と人間」は97、98年度を杉谷が講じた。長尾は教務助手を務め、本稿の資料を作成し杉谷の草稿を修正した。受講生数は97年度64名、98年度56名であり、約6割が人文科学学科1年生であった(第1表)。

この科目は、講師にとっては、自然地理・歴史・哲学の三題噺を平易に語りつつ、普段は問われることのない「学問とは何か」を新入生と考える難しさがある。戦略的には、既存の1年次専攻科目「地理学概説」(地理学教官全員による分担講義形式)とあわせて、地理志望者を募る重要な機会でもある。本稿は、学生の思考性向を探りながら授業展開をした、導入部の実践報告である。引用文献の一部は、講義中に配布資料としたり、読み物として示したものである。

第1表 98年度受講生の構成

人文科学学科(1学年定員57名)			
(進学前)	1年生	35名	62%
(進学後)	2	4	7%
	3	2	4%
旧哲学科	4	2	4%
言語文化学科	1~3	11	19%
人間社会科学科	2, 3	2	4%

### 2. ヒトは宇宙人の子孫か？

講義は、この唐突な問いかけで始まる。出典はいわゆるトンデモ本の1つで、「月面にピラミッドが発見された。これは宇宙人來訪の証拠であり、人類はその子孫なのだ」という。これに対する学生の意見を書いてもらい、第2表に分類・集計した。

基本的には自然科学を標榜しているはずの講義として、ひどく困惑する結果は、a1, n8のように「宇宙人とは何か」という哲学的(言語的)迷路に陥る学生が、約3割もいることだ。自然科学では、言葉遊びからは何も生じない。講義はここから始めなければならない。しかし、それよりも困るのは無思考状態であろう。a2は単純に信じたい者から冗談と聞いた者までであるが、「わからない・どうでもよい」という回答も含めて、3割ほどが議論から逸脱している。

a6, a7は、宇宙や宇宙人を「神」と換言すれば、天地創造神話に他ならない。a3の生命発生も同類だ。これらの計数が示すように日本人にはこの発想は希薄だが、それだけに欧米では根強いことを知っておく必要がある(朝日新聞, 1996)。人間、自然界、生死といった重い論題になったとき、一神教社会の思考の基底には、伝統的に絶対的な創造主がいる。それは一方で、神の摂理(真理)を解明すべく哲学や初期科学を発達させた。欧米人の言う理性とは、神が特別に人間に授けた真理をつかむ能力を指す(生松・木田, 1996)。ただし、その理性とは言語的・思弁的理解にすぎず、しかも養老(1998)によればヒトの脳構造に固有の機能にすぎないらしい。神こそヒトの脳の究極の被造物である。それを宇宙人と呼んでも本質的な違いはない。

日本人は、多神的認識を持ちそれを生活リズムとしながら、死という最も宗教的たるべき機会を、

第2表 「ヒトは宇宙人の子孫である」という命題に対する意見

	人数	%
肯定的		
a1) ヒトも宇宙人の一種だから、命題は正しい(トートロジーである)	32	27
a2) 理由は示されていないが、ありうる(空想として楽しい, を含む)	17	14
a3) 生命発生過程または進化途上で紛れ込んだ可能性はある	9	8
a4) 他の証拠(例えば遺体)が発見されれば、ありうると考える	3	3
a5) 進化論にも未解明な部分がある、実際に進化を見た者はいない	3	3
a6) 地球人は宇宙そのものの子孫(被造物)といえる	1	1
a7) 地球人だけでなく地球や銀河系も宇宙人の被造物かもしれない	1	1
否定的		
n1) 月のピラミッドでは証拠不十分、または岩山の誤認だ	25	21
n2) 宇宙人は存在しない、または定義が不明だ	21	18
n3) ヒトはサルから進化した、あるいは地球環境下で進化したものだ	18	15
n4) 月とエジプトのピラミッドの間には関連はない	10	8
n5) 宇宙人の子孫ならばヒトの歴史は違ったものになったはずだ	5	4
n6) エジプトのそれは古代エジプト人が作った考古学的証拠がある	3	3
n7) 宇宙人の子孫ならば現在も彼らとの通信があるはず	2	2
n8) 宇宙「人」というヒューマノイドは定義上、地球人しかいない	2	2
n9) 宇宙人の子孫ならば他の地球動物とは似ていないはず	1	1
n10) 月にヒトは住めない	1	1
n11) 理由は示されていないか文意不明だが、とにかく否定的	7	6
わからない・どうでもよい	15	13
	計176	

注：学生総数は120名だが、1通のレポートに複数の内容を記述している場合があるので、総計数は176になった。ただし、パーセンテージは120名に対して算出した。

輸入品の念仏や仏教儀式による安直な極楽往生に委ねてきた(阿満, 1996)<sup>2)</sup>。やはり大きな影響を与えた儒教は、現実的処世訓として超自然的存在には言及しなかった(『論語・述而篇』に「子不語怪, 力, 乱, 神」)。日本人は、さらにその道徳性すら捨てて即物的側面を重視し、それを基礎としてヨーロッパ近代合理主義を受容した(辻, 1988)。われわれは、こういう独特の精神分裂症的立場で自然界に対峙してきたのである。

### 3. 反証

宇宙人の話はいかにも荒唐無稽だ。しかし、n2, n11のように単に否定するのも思考停止の一種であり、正邪をつけるには暴力しかなくなる。宗教戦争はこの形式をとる。つまり反証が求められるわけで、否定意見にはそれに気づいたものも多い。そのうち筆者が最も妥当とみるのは、もちろんn3の進化の事実である。進化については学生も当然知っているはずだが、前述のように自然科学

との認識が低く、15%しかいなかった。ちなみに、他大学教育学部で「自然環境」の講義名で同じ調査をすると、より高率の結果になる。

しかし筆者は、具体性や論理性の点では、ヒトと他動物との類似性を反証の根拠としたn9のたった1名を、より高く評価する。少なくとも脊椎動物が同じ生物系統に属することは、まず解剖学的・古生物学的に認められ<sup>3)</sup>、さらに生化学的・分子遺伝学的研究からますます確実になっている。講義では、廃止科目「地質学」の資料を転用して、哺乳綱と霊長目の分類や特徴、環境変化と進化の関係を数回をかけて紹介する。高等学校で生物を履修しなければ、世界史の冒頭ページで古人類の名前くらいしか学習しないはずなので、学期の最初でこれを延々とやることは、文系学生には(いささか食傷することも含めて)強い印象を残すらしい。

これら無数の反証は、かりに月にピラミッドが実在し、宇宙人が来訪して「わが子孫よ」と呼びかけてきても、それくらいの事実では覆らないの

である。むしろ、その宇宙人を嘘つきと疑うべきだ<sup>4)</sup>。したがって、証拠不十分という a4, n1 も一見もっともだが、思考停止と大差ないことがわかる。近年はエコロジー思想の影響を受けて、「人間も自然界の一部」と誰もが口にするようになった。しかし、上述の結果を見るかぎり、その意味が真に理解されているといえるだろうか？<sup>5)</sup>

#### 4. 自然史科学

進化そのものは化石証拠から確実だ。しかしその要因論となると、筆者も門外漢なので講義では中立説(木村, 1988)にしか言及しないが、多くの異説や珍説が提唱されてきた経緯がある。a5の不可知論や a3の混血説は、そこにつけ込んで進化そのものを否定したり、安易に超自然的な要因をいう言説の影響であろう。

実は、上述してきた「自然科学」は、正しくは「自然史科学」というべきものである。実験再現性のない自然史科学では、要因については限られた状況証拠から推定するしかなく、因果律は自明ではない。池田(1999)は面白い議論を展開していて、科学もオカルトも本来は同類であるが、科学は実験再現性によって大衆化し社会的に認知されたと見る。しかし、現代科学は大衆の理解を越えてしまって環境汚染などの負の評価が発生し、オカルトが再興してきたという。

池田の議論は自然史科学の特殊性をきちんと区別していないが、環境問題の鍵はそこにあると思う。現状は、実験科学畑の科学万能信仰が行き詰まりつつも、なおもそれに環境問題の解決を委ねようとする傾向がある。そこに実験再現性のない自然史科学がどう関われるかが重要なのである。さらに、環境問題にもややオカルト化した側面があって、ディーブ・エコロジー思想や東洋思想を過大評価するオリエンタリズムすら絡んでいる。学生にはそれらを峻別しながら、今後の人類の行く末を考えてほしいと思う。

#### 5. 科学と社会

進化論(ダーウィニズム)は、しかし、科学的学説である以上に特定の時代と社会に現れた思潮でもあることを、大学生ならば知るべきである。

ダーウィンはビーグル号船中で、近代地質学の

祖ライエルの新刊書『地質学原理』を読んでいた。19世紀前半に示準化石による地質年代区分が相次いで確立したことと進化論の間には、クーン流の科学革命はない。さらに、地質学発展の背景には、産業革命によって石炭採掘が本格化し、地質調査が進んだ事情があった(小林・岡, 1954)。彼が証拠とした育種技術も発達していた。自然淘汰説もマルサスの影響という。進化論はダーウィンなくても提唱されただろうし、事実、ラマルクやウォレスがいた。

進化論は、当初はキリスト教に拒絶されたことはよく知られている。しかし、天地創造から終末にいたる直線的な時間経過にしたがって「物事が進む」という考え方こそ、キリスト教的思考なのである(鈴木, 1976)。万物が輪廻しヒトが動物にも転生するという宗教性からは、進化論は生まれまいだろう<sup>6)</sup>。生物淘汰という冷酷な発想ができたのも、都市滅亡や大洪水などのアーマゲドン神話をもつ宗教性かもしれない<sup>7)</sup>。キリスト教との摩擦は、内輪もめにすぎないのではないか？<sup>8)</sup>

結果的には、進化論は、その自然淘汰説が自由競争原理と読み替えられることで、産業革命で確立した資本主義社会のパラダイムとしてフィードバックしていった。学問はきわめて社会的な存在である。いま自然史科学や環境系科学の重要性をいうのも、そういう事情による。

#### 6. おわりに

入学時の無記名質問票調査では、地理志望者は推薦入学者を含む確信犯的な少数しかいない。その背景には、高等学校で地理を履修しなかった(開講されなかった)という事情もあると推定される。それが1年半後の進学時には、歴史が依然として20名弱と多いものの、地理は15名弱までシェアを拡大する。それは、地理学教官による入門科目や一般教育科目の魅力によるものと自負している。

全国で進んできた大学改組は、看板を掛け替えたただけの場合もあろうし、地理学科が空中分解してしまった場合もあろう。本学では、学部では他学科との競合的統合を、大学院では分割(修士課程)や属人的分解(博士課程)を選択した。関連記事としては、雑誌『地理』(1999年5月号)の教室紹介も参照されたい。

いずれにしても、地理学を馴れ合いの楽屋落ちで済ませられる時代ではなくなり、筆者は大変良かったと思う。ここに紹介したように、「自然と人間」には地理学という枠の認識はない。地理学を出自とする者が「自然」・「人間」というキーワードから連想したことを、教壇の舞台上で次々と演じてみせるだけである。

#### 注

- 1) このテーマは、講義中盤以降では、地中海農耕文化とキリスト教、中世の大開墾とパストラル景観の創出、森林破壊と魔女・ウィルス病、中世システムの崩壊と植民地支配、開墾と野生動物・先住民などの話題に発展していく。いずれも種々のビデオ資料(杉谷, 1992)を併用する。
- 2) 仏陀オリジナルの教えには神仏はなく、修行により独力でこの世で解脱することを説いた。伝播末端にあたる日本仏教は、偶像崇拜・他力本願という点で極限まで墮落(大衆化)したのである。
- 3) すでにアリストテレスはヒトを動物の一種と認め、ローマの医師ガレヌスは解剖によってヒトとサルとの類似性を指摘していた(寺田, 1967)。
- 4) 本誌既刊号でも紹介したホーガン(1980)は、生物学や地学を基礎に宇宙人による遺伝子操作を取り入れた、傑作SF小説である。嘘をつくなら、よく勉強してこれくらい巧妙な虚構を構築すべきだ。
- 5) 環境変化と人類進化のテーマは、気候変化と文明、環境決定論、風土論、エコロジー思想、都市化と自然回帰、故郷観などの話題に発展していく。
- 6) これは発想しなかっただけで、明治期日本人は外国人教師が驚くほど抵抗なく進化論を受容した。育種技術においても、江戸期日本人はメンデル遺伝すら経験的に知っていたが、それを理論化する発想は持たなかった。なお、「輪廻」を魂の変転ではなく「物質循環」ととらえると、この考え方は科学的に正しく、現代に必要とされる物の見方である。
- 7) 近代地質学は、そういう聖書流の天変地異説から脱却することを要した。しかし、研究が進むにつれ、巨大隕石落下や大洪水あるいは氷河性海水準変動など、本当の天変地異が明かになったのは皮肉である。
- 8) 村上(1995)によれば、前期近代までの科学は、キリスト教や呪術と一体となった体系として成立した。通説のように、宗教と決別することで近代科学が成立したのではない。

#### 文献

- 朝日新聞(1996): 激しさ増す進化論批判・米南部. 5月2日付.
- 阿満利磨(1996): 『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書, 206p.
- 生松敬三・木田元(1996): 『現代哲学の岐路・理性の運命』講談社学術文庫, 270p. (原本1976)
- 池田清彦(1999): 『科学とオカルト』PHP新書, 206p.
- 木村資生(1988): 『生物進化を考える』岩波新書, 290p.
- 小林英夫・岡邦雄(1954): 『地学史』中教出版, 467p.
- 杉谷隆(1992): ビデオ画像資料の管理システム. 地理, 37-7, 138-139.
- 鈴木秀夫(1976): 『超越者と風土』大明堂, 168p.
- 辻達也(1988): 『江戸時代を考える』中公新書, 155p.
- 寺田和夫(1967): 『人種とは何か』岩波新書, 211p.
- ホーガン, 池央耿訳(1980): 『星を継ぐもの』創元SF文庫, 308p. (原著1977)
- 村上陽一郎(1995): 『科学史の逆遠近法』講談社学術文庫, 323p. (原本1982)
- 養老孟司(1998): 『唯脳論』ちくま学芸文庫, 278p. (原本1989)